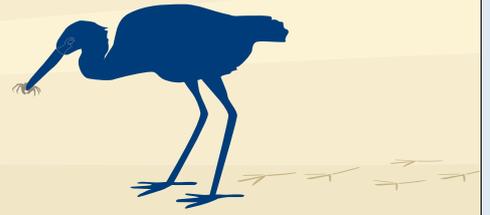


なぎさ NEWS



ゴカイの視点で考える

「西なぎさ」で砂や泥を掘ると必ずといっていいほど出てくるのがゴカイのなかまです。高校生・大学生向けイベント「海の学び舎」第2回では、干潟に生息するゴカイと日本一大きな干潟がある有明海について、鹿児島大学の佐藤正典先生にご講演いただきました。ゴカイの生態の中では、とくに「生殖群泳」のお話が印象的でした。生殖群泳とはたくさんのおスとメスが、特定の時期、時刻に一緒に水中に泳ぎだし、卵や精子を放出する行動です。このような繁殖生態に興味を持った参加者も多かったようです。

また、研究のフィールドである有明海の保全にも取り組む先生は、生き物目線になることが重要であるとお話をされました。有明海の諫早湾では、干拓事業のため大きな堤防が造られ、干潟やそこに生息する生き物に大きな影響を与えたという過去があります。干拓のために堤防をつくり、人間が海へと進出していくのではなく、干潟より一歩さがった位置に人間の生活圏をおくことで、人間にとっては干潟が自然の堤防として役立ち、そして干潟の生物環境も守られます。

それは東京湾の干潟でも同じです。生き物のことを知り、生き物の視点で考えることが、干潟などの保全には重要であることを参加者も理解してくれているようでした。(教育普及係 西村 大樹)



「西なぎさ」で観察されたゴカイのなかま

干潟の小さな生き物

潮の引いた「西なぎさ」ではたくさんの生き物を観察することができます。小さな砂団子をせっせとつくっているコマツキガニ。魚などの遺骸にあつまっているアラムシロガイ。干潟の地面の、小さな穴があいているところをシャベルで掘ってみると、ニョロニョロとした姿のゴカイのなかまや、スナモグリという甲殻類を見つけることもできます。また、冬になると越冬のために多くの渡り鳥が「西なぎさ」にやってきます。「西なぎさ」をはじめとする干潟には、このような“大きな生き物”のほかにも、顕微鏡を使わないと見えない小さな生き物が砂の間にたくさんくらしています。

大きさ1 mmにも満たないような小さな生き物(メイオベントスと呼んだりします)には、線虫類やカイアシ類のほか、貝形虫類や動吻動物といった聞きなれない生き物たちがばかりが含まれています。しかし、この小さな生き物たちは、カニやゴカイといったより大きな干潟生物のエサになるだけでなく、海水の浄化にかかわるなど、干潟の環境にとってとても重要な役割を担っています。知らない気がつかないような小さな生き物ですが、生態系の一員として干潟の環境を支えているのです。

(教育普及係 田中 隼人)



「西なぎさ」で採集した貝形虫(甲殻類)

なぎさ 生き物ミニ情報

水族園は、東京湾の人工干潟「西なぎさ」と「東なぎさ」で、さまざまな調査を行っています。今回は、12月に行った地曳網調査と生き物調査の結果をお伝えします。干潟の生き物たちの、冬ならではのすごし方を観察することができました。

12月地曳網調査: 気温 10.3℃、水温 13.0℃。寒さが厳しく冬の訪れを感じました。前回10月の調査で魚類は9種見られ、10尾以上採集された種もいましたが、今回はエドハゼとアシシロハゼの2種のみで、数も1尾ずつとさびしいものでした。これから暖かくなるにつれて、生き物はだんだん増えていきます。

12月生き物調査: 気温 12.2℃、水温 16.5℃。昼間の干潮時でもあまり潮が引かず、地上で活動する生き物はほとんど観察できませんでした。ただ、砂や泥を掘るとゴカイのなかまが見つかりました。また、コマツキガニも掘り起こした砂の中にいましたが、寒さのため掘り起こされても長い間じっとしていました。